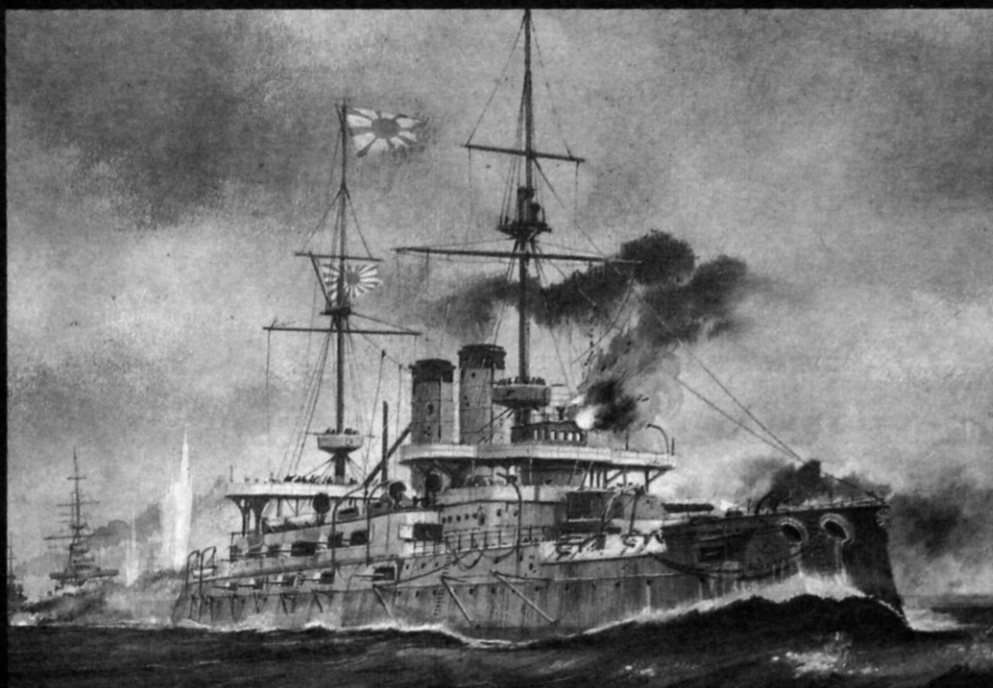


空前の艦隊決戦 日本海海戦

BATTLE OF TSUSHIMA

by Eiichi Aoki



青木 栄一

(東京学芸大学教授)

ロシア側が描いた日本海海戦における三笠。

本年、1995年は日本海海戦から数えて90年目にあたる。

日本の近代史を振り返るとき、当時の日本が国の総力をあげて戦い、勝利を得た日露戦争の意義とその影響が極めて大きなものであったことは今さらいうまでもないが、そのなかで日本海海戦の持つ意義は高く評価せねばならない。90年の昔は、完全に歴史学の世界である。しかしながら、近代史のなかで戦争や戦闘についてほとんど触れることを避けてきた第2次大戦後の日本の歴史教育を考えると、90周年の機会にこの海戦の持つ意義を概説することは無駄なことではないと思う。本稿では戦闘の経過だけでなく、日本とロシアのシーパワーの衝突というマクロな視点からもその意義を考えてみたい。

▶ 日露戦争のシーパワー

日露戦争(1904~05年)は、17世紀以来のロシアの東進政策から必然的に導き出された戦いであった。広大なシベリアを東進して太平洋岸に領土を拡大したロシアは、さらに不凍港を求めて清国の領土であった満州を侵し、その先端は朝鮮半島北部にも侵入するに至った。日清戦

争(1894~95年)後の日本は朝鮮半島を自国の勢力圏とみなしていたから、ロシアの行動は日本への挑戦を意味した。弱肉強食の帝国主義時代にはよくあった話である。

ところで、広大なユーラシア大陸北部を国土としたロシアは、四つの海に面していた。バルト海、黒海、太平洋(日本海と黄海)、北氷洋である。当時の北氷洋はまだ戦略的価値が小さく、大規模な艦隊は常駐していなかったが、他の三つの海にはそれぞれに強力なロシア艦隊が配置されていた。これらの艦隊はただ空間的に分散しているだけではなく、気候的条件や国際条約によって厳しい束縛を受けていた。たとえば、バルト海の艦隊はフィンランド湾の結氷のため、冬季には大部分の艦艇は活動不能となったし、黒海の艦隊は戦時にはベルリン条約の規定によって、出口にあたるダーダネルス、ボスポラス両海峡の通過が禁止されてしまうので、艦隊を他の海域に転用することはできなかった。

1895年、ロシアはいわゆる三国干渉によって、日本に遼東半島を放棄させ、次いで清国に圧力を加えて関東州を租借、旅順(軍港)と大連(商港)という不凍港を手に入れた。ハルビンから東清鉄道より分岐し、大連・旅

順に至る南満州鉄道が1902年に開通して、ロシア本国との鉄道連絡が完成し、これによって、旅順はロシアにとって極東最大の軍事拠点としての整備が進んだ。

旅順には1898年3月、初めてロシア艦隊が入港し、その後、極東におけるロシア艦隊の増備が続いた。1904年2月の日露開戦時のロシア主力艦艇の勢力分布は次頁の第1表のとおりであった。

この表で明らかなように、バルト海の艦隊は極東の艦隊よりも隻数の上では多いが、質的には極東の艦隊が優れていた。極東に配された7隻の戦艦はいずれも比較的新しいものであったのに対して、バルト海の戦艦は開戦時に完成直後か艤装の最終工程にあったボロディノ Borodino 級と、極東への回航途中で開戦となりいったん引き返したオスラビア Oslabia を含むものの、その他はいずれも旧式艦であった。装甲巡洋艦にあつてはその差はさらに大きかった。したがって、ロシアが開戦時に極東に集中した主力艦艇は最新鋭のものといつてよく、これのみで十分日本艦隊に対抗できるものであつて、戦略的には申し分のない配置だったのである。

極東のロシア艦隊は太平洋艦隊と称し、5月から9月に至る期間にその主力は優れた造修機能を持つウラジオストクに在泊し、冬季は旅順を基地とすることが慣例となった。1904年2月の開戦時に太平洋艦隊の主力は旅順に在泊し、ウラジオストクには装甲巡洋艦3隻と防護巡洋艦1隻を主力とする艦隊が配備されているにすぎなかった。

対する日本艦隊は、戦艦6隻、装甲巡洋艦8隻を基幹とし、この14隻はすべて1897年以降に竣工した当時の最新鋭艦であり、戦艦・装甲巡洋艦それぞれが類似した諸元・性能の艦で構成され（開戦直前に購入された装甲巡洋艦春日と日進はやや異なる諸元の艦であったが）、艦隊行動には適していた。防護巡洋艦は14隻を保有し、装甲巡洋艦8隻とともに極東配備のロシア艦隊より質・量とも優勢であった（第1表参照）。駆逐艦、水雷艇では日本側の優勢はさらに顕著であった。

戦時における日露両国艦隊の任務は、日本海・朝鮮海峡・黄海などの朝鮮半島周辺海域のシーパワーの確保であった。陸上の戦闘は朝鮮半島および満州南部と想定されていたから、特に日本側は同海域のシーパワー確保は必須であり、ロシア艦隊がこれらの海域で自由に行動するような事態となれば、勝利の可能性はなかった。したがって、日本側からみると、ロシア艦隊を旅順とウラジオストクの両港に封じ込めることが勝利を獲得する絶対的な条件となったのである。

▶ 日露戦争時の主力艦とその特徴

19世紀末から20世紀初頭にかけては、戦艦(Battle-

ship)という艦種が確立した時代であった。戦艦とはいうまでもなく、大口径、長射程の重砲を主たる攻撃力として備え、かつ相手の戦艦から飛んでくる同じ程度の重砲弾が貫通できないくらいの厚い装甲で防御された軍艦である。当時の戦艦は常備排水量10,000~15,000トン程度、口径9.4~13.5インチ(240~343ミリ)の重砲を主砲として、連装砲塔2基におさめ、1基を前部に、1基を後部のそれぞれ中心線上に配置し(合計4門)、4.7~6インチ(120~152ミリ)くらいの中口径砲を副砲として両舷に各数門ずつ配していた。イギリス海軍では主砲を12インチ(305ミリ)、副砲6インチ(152ミリ)とした艦が多く、世界的にみてもこれが標準型といえた。日本の戦艦は全部、一部の10インチ(254ミリ)砲装備艦を除くロシア戦艦の大部分が12インチ砲を装備していた。最大速力は17~19ノット程度であった。

戦艦が自艦の持つ砲力を最大に活用できる態勢は、舷側方向に砲火を指向できるときで、4門の主砲全部を戦闘に参加させることができる。だから艦隊の指揮官は、できるだけはやく敵に対して全主砲を活用できるような態勢に艦隊をもってゆかねばならないことになる。両方の艦隊の指揮官が同じように考えて有利な態勢をとろうとすれば、複数の戦艦が旗艦を先頭とする単縦陣を組み、並行して進みながら、相互に舷側を向けあつて砲火を交えるようになりやすい。このような態勢になって、両艦隊の砲力が同じレベルならば、あとは相手にどれだけ多くの砲弾を命中させるかという射撃の技量が勝敗を決めるであろう。

19世紀後半の約30年間くらいは有効な戦術と信じられた衝角攻撃は、大砲の射程の長大化とともにしだいに非現実的なものとなった。日露戦争の10年前に起こった日清戦争の黄海海戦(1894年)では、単縦陣を組んだ日本艦隊がV字梯陣で突撃してきた清国艦隊を砲力だけで撃破したという歴史的事実があった。

しかし、戦艦同士が対戦して相手を撃沈したという戦例は当時はまだなかった。日清戦争の黄海海戦では日本側の大砲の主力が中口径砲であったためもあつて、清国側の戦艦ともいべき定遠、鎮遠の2隻は多数の命中弾を受けながらもついに沈まなかったし、米西戦争のサンチャゴ沖海戦(1898年)では4隻のイスパニア装甲巡洋艦はこれまた多くの命中弾がありながらも沈むことはなく、自ら海岸にのりあげて最期をとげている。

重砲弾によって厚い装甲で防御された戦艦を撃沈できるのかという命題は、まだ実証されていなかった。これは数千メートルを隔てた遠距離砲戦となると、命中率が下がり、また命中したとしても船体や砲塔の厚い装甲を貫通できるのか疑問があつたからである。現に日露戦争でも、1904年8月10日の黄海海戦(日清戦争の同名の海

戦との混同を避けるため、8月10日の海戦という呼称もある)では、日本艦隊はロシア艦隊の旅順脱出を阻止して戦闘の目的は達したものの、1隻も沈められなかった。

その意味で、戦艦という艦種は強力な攻撃力を持つものでありながら、その有効性についてはまだまだ未知数の部分が大きかったといえる。

次に巡洋艦を大型化し、防護甲板のほかに舷側水線部や砲塔にも装甲を張った装甲巡洋艦は、戦艦に次ぐ強力な艦種であった。6~9.2インチ(152~243ミリ)砲を主砲とし、それに対抗できる程度の厚さの装甲を施されていた。

装甲巡洋艦の用法は、国によって考えが異なっていた。日本海軍では準主力艦として戦艦隊と行動をとにし、艦隊決戦にも用いる思想で設計されていたが、ロシア海軍では海上交通の保護や通商破壊戦により指向していたようである。このため、日露の装甲巡洋艦がいずれも常備排水量10,000トン前後、速力20ノット前後、8インチ砲を主砲としていながら、舷側装甲の厚さと範囲、主砲の配置方法などで若干の相違があった。

▶ 日本海海戦に至るまでの海上戦の経過

日露の開戦は、1904(明治37)年2月8日夜、日本の駆逐隊による旅順港襲撃で始まった。宣戦布告に先立って行なわれたこの奇襲によって、旅順港外に定泊していたロシア戦艦2隻と防護巡洋艦1隻が被雷して浅海に擱坐した。そして翌2月9日以降、日本艦隊はその主力を挙げて黄海北部に進出し、旅順港を封鎖監視するとともに、時に応じて旅順港外に進んで、要塞砲台や在泊艦艇と交戦した。また、朝鮮の仁川港にあったロシア巡洋艦ワリヤグ Varyag と砲艦コレーツ Korietz も2月9日、優勢な日本艦隊に撃破され、自沈してしまった。

ロシア側では、3月8日に水雷戦の大家として知られ

たマカロフ中将が艦隊司令長官として旅順に着任するや、しばしば港外に出撃して日本艦隊に戦闘を挑んで、あなどりがたい戦意を示した。しかし、着任後わずか1カ月余の4月13日の出撃で、機雷に触れて旗艦ペトロパブロフスク Petropavlovsk が爆沈し、戦死した。これ以降、旅順のロシア艦隊の行動は著しく退嬰的となってしまった。その後のロシア艦隊主力の行動をみると、6月23日に出撃したものの戦意に乏しく、日本艦隊に遭うや小規模な戦闘の後に旅順に退却した。また8月10日にはウラジオストクに向けて脱出を図るという一大決意のもとに出撃したが、再び日本艦隊に阻止され、旗艦ツェザレヴィッチ Tsesarevitch 大破(膠州湾に入港、抑留武装解除)、司令長官や艦隊幹部を失って、艦隊の大部分は旅順に逃げ帰った(黄海海戦)。この時点でロシア太平洋艦隊は実質的に活動をやめ、港内にむなしく止まるだけの存在となってしまった。やがて要塞攻略の任にあたった日本陸軍(第3軍)によって、旅順の包囲網は逐次せばまり、12月に入ると陸上からの間接射撃によって港内の艦艇は次々と撃沈されて全滅するに至った。

一方、ウラジオストクにあったロシア巡洋艦隊は積極的に出撃し、日本海はもとより、津軽海峡を突破して本州太平洋岸まで進出して、活発な通商破壊戦を実施した。日本側は装甲巡洋艦を基幹とする第2艦隊で警戒させたがなかなか捕捉できず、軍隊輸送船を含む多数の商船が犠牲となった。しかし、ついに8月14日朝、朝鮮半島南東部の蔚山沖で両艦隊は遭遇し、ロシア側は装甲巡洋艦リュリック Rurik が撃沈され、他の2隻も大損害を蒙って辛うじて逃れた。これによって、ウラジオストクのロシア艦隊もその活動に終止符を打った。

こうして、1904年8月までに極東のロシア艦隊は実質的に撃滅され、日本は日本海、朝鮮海峡、黄海のシーパワー確立に成功したのであった。

第1表 日露戦争時の日露主力艦艇勢力

艦 種	ロ シ ア					
	太 平 洋 艦 隊		バルチック艦隊		黒 海 艦 隊	
	艦 名 (進水年)	数	艦 名 (進水年)	数	艦 名 (進水年)	数
戦 艦	ツェザレヴィッチ(1901)、レトヴィザン(1900)、ボビエダ(1900)、ベレスウェイト(1898)、セヴァストープリ(1895)、ボルタワ(1894)、ペトロパブロフスク(1894)	7	アリヨール(1902)、クニャージ・スワロフ(1902)、アレクサンドル3世(1901)、ポロディノ(1901)、オスラビア(1898)*、シソイ・ヴェリキー(1894)、ナヴァリン(1891)、ニコライ1世(1888)、アレクサンドル2世(1887)	9	ボチョムキン(1900)、ロスティスラフ(1896)、トリ・スヴィティテリヤ(1893)、ゲオルギ・ボビエドノゼツ(1892)、ドウィエナザット・アポストロフ(1890)、シノーブ(1887)、エカテリーナ2世(1886)、チェスマ(1886)	8
装甲巡洋艦	バヤーン(1900)、グロムボイ(1899)、ロシア(1896)、リュリック(1894)	4	バミアト・アゾヴァ(1888)、アドミラル・ナヒモフ(1885)、ドミトリ・ドンスコイ(1883)*、ウラジミール・モノマフ(1882)	4		0
海防戦艦		0	グラーフ・アブラクシン(1896)、アドミラル・セニャーウィン(1894)、アドミラル・ウシャコフ(1893)	3		0
防護または偵察巡洋艦	ボガティール(1901)、バヤーリン(1901)、ノーウィック(1900)、アスコルド(1900)、バルラダ(1899)、ディアナ(1899)、ワリヤグ(1899)	7	オリョーグ(1903)、アルマーズ(1903)*、ジェムチューク(1903)、イズムルード(1901)、アウローラ(1900)*、スウェトラナ(1896)、アドミラル・コルニロフ(1887)、リンダ(1885)	8	バミアト・メルキュリヤ(1880)	1

注1)1880年以降に進水し、1904年までに完成した艦のみを示す。2)*のロシア艦は、太平洋艦隊増勢のため開戦時回航途上にあったが、開戦とともにいったん帰国した。3)*を付した鎮遠の公式の類別は二等戦艦。

▶バルチック艦隊の極東派遣

開戦後、ロシア政府はバルト海艦隊(バルチック艦隊)を極東に派遣して太平洋艦隊の増勢を図ることとし、1904年4月30日にこれを発令した。当時極東にあった艦隊を太平洋第1艦隊と称し、新たに派遣する艦隊を太平洋第2艦隊として、司令長官に海軍軍令部次長ロジェストウェンスキー少将(のち中将に昇任)が任命された。

しかし、派遣艦隊の整備は難行した。短時間で整備可能な艦はおおむね旧式であり、派遣艦隊を真に強力なものにするために、当時機装中であった新鋭の戦艦ポロディノ級を加えねばならなかったからである。派遣艦艇整備の突貫工事の結果、1904年8月までにほぼ出動可能な状態となった。

ロシア政府部内の意見対立や、石炭補給のための寄港地準備のための外交折衝、そして訓練などに日子を費やし、派遣艦隊のリバウ(バルチック艦隊の前進基地、現在はラトヴィア共和国領内)出港は10月15日となった。派遣艦隊にとっては最大特急の半年間であったが、この間にロシア極東の艦隊は実質的に全滅してしまっていた。

元来、バルト海からの派遣艦隊は単独で日本艦隊に対抗できる勢力ではなく、極東の艦隊と合同して初めて戦略的に優勢な勢力となるはずのものであった。しかし、極東の艦隊はすでに8月に壊滅していたのであるから、10月になってからの派遣が時機を失していたことは明らかであった。さらに加えて、この派遣艦隊は途中のマダガスカル島(当時はフランス領、フランスはロシアに友好的であった)ノシベで約2カ月間の待機を余儀なくされた。

これは1905年1月1日に旅順要塞が降伏したことから関係がある。ロシア政府は派遣艦隊の処置に迷ったが、司令長官ロジェストウェンスキーはさすがに艦隊の現状

をよく認識していた。彼の主張は最精鋭の艦のみ率いて、なるべく早くウラジオストクに直行し、ここを基地として日本側の海上交通を脅かすことにあった。日本艦隊はすでに旅順降伏の直前に封鎖を解いて本国に帰還し、新来のロシア艦隊迎撃のために艦艇の整備と訓練に毎日費していたから、ロシア艦隊のウラジオストク到着が1日早ければそれだけロシアに有利であり、1日遅ければそれだけ日本が有利となることは明らかであった。

しかし、ロシア政府は派遣艦隊の勢力不足という点にまだ未練を持っていた。そこで新たに太平洋第3艦隊を編成し、第2艦隊の後を追わせることになった。だがバルト海にはすでにロクな軍艦は残っていなかった。ポロディノ級の5番艦スラヴァ Slava は当時機装中であったが、これはとうてい間に合わなかった。結局、戦艦インペラートル・ニコライ1世 Imperator Nikolai I を旗艦とし、ネボガトフ少将に率いられた旧式軍艦5隻、付属船7隻が1905年2月15日にリバウ港を出港することとなった。これに対してロジェストウェンスキーは新鋭艦の足手まといになるとして反対したが容れられず、またも彼の艦隊は当時フランス領であったベトナムのカムラン湾付近で約1カ月待たねばならなかった。

太平洋第2・第3の両艦隊は5月9日、カムラン湾北方のヴァン・フォン湾外で合同し、14日にはいよいよウラジオストクに向けて出港した。

ロシア艦隊はウラジオストクへの最短コースたる朝鮮海峡突破を図った。そして仮装巡洋艦2隻を本州東岸沖に分遣して日本側を牽制しようとした。朝鮮海峡で迎撃を計画していた日本側は、ロシア艦隊の進路に関する正確な情報をつかめず、一時は津軽海峡方面への移動を考えたが、大本営の情報などもあって、朝鮮海峡にとどまった。

ロシア艦隊は長途の航海に疲れ果てた艦隊であった。戦艦の隻数は少なくなく、10インチ砲以上の重砲数では勝っていたが、多くの旧式艦を含んでおり、乗員の練度も低かった。巡洋艦以下の隻数では日本艦隊が圧倒的に優勢であった。ロジェストウェンスキーもこのことをよく知っており、彼は戦闘に勝つことよりも、ひたすらにウラジオストクへの強行突破を第一義として対馬海峡に向かったのであった。

こうして、運命の日5月27日を迎えることとなる。

この日の両艦隊の編成は第2表、第3表のとおりであった。

▶日本海海戦の経過

1) 主力部隊の決戦

日本側は五島列島北西沖に哨戒線を設け、外線(南側)に仮装巡洋艦4隻を、内線(北側)に第3戦隊の巡洋艦

日 本		
艦 名 (進水年)		数
三笠(1900)、初瀬(1899)、朝日(1899)、敷島(1898)、八島(1896)、富士(1896)		6
日進(1903)、春日(1902)、磐手(1900)、出雲(1899)、八雲(1899)、吾妻(1899)、浅間(1898)、常磐(1898)		8
鎮遠(1882)**		1
音羽(1903)、対馬(1902)、新高(1902)、笠置(1898)、千歳(1898)、高砂(1897)、明石(1897)、須磨(1895)、吉野(1892)、秋津洲(1892)、橋立(1891)、松島(1890)、千代田(1890)、厳島(1889)、浪速(1885)、高千穂(1885)、和泉(1884)		17

第2表 日本海海戦に参加した日本艦隊の編成

艦 隊 名	司 令 長 官	戦隊名、隊名	司令官または司令	所 属 艦 名
第1艦隊	大將・東郷平八郎 (連合艦隊司令長官)	第1戦隊 第3戦隊 第1駆逐隊 第2駆逐隊 第3駆逐隊 第14艇隊	中將・三須宗太郎 中將・出羽 重遠 大佐・藤本秀四郎 大佐・矢島 純吉 中佐・吉島重太郎 中佐・関 重孝	戦 艦 ●三笠、敷島、富士、朝日、春日(装甲巡)、●日進(装甲巡)、龍田(通報艦) 巡洋艦 ●笠置、千歳、音羽、新高 駆逐艦 ●春雨、吹雪、有明、叢、暁(旧レシーテリヌイ) // ●臘、電、雷、曙 // ●東雲、薄雲、霞、漣 水雷艇 ●千鳥、隼、真鶴、鵠
第2艦隊	中將・上村彦之丞	第2戦隊 第4戦隊 第4駆逐隊 第5駆逐隊 第9艇隊 第19艇隊	少將・島村 速雄 中將・瓜生 外吉 中佐・鈴木貫太郎 中佐・広瀬順太郎 中佐・河瀬 早治 中佐・松岡 修蔵	装甲巡 ●出雲、吾妻、常磐、八雲、浅間、●磐手、千早(通報艦) 巡洋艦 ●浪速、高千穂、明石、対馬 駆逐艦 ●朝霧、村雨、朝潮、白雲 // ●不知火、叢雲、夕霧、陽炎 水雷艇 ●蒼鷹、雁、燕、鵠 // ●鷗、鴻、雉
第3艦隊	中將・片岡 七郎	第5戦隊 第6戦隊 第7戦隊 第15艇隊 第10艇隊 第11艇隊 第20艇隊 第1艇隊	少將・武富 邦鼎 少將・東郷 正路 少將・山田 彦八 中佐・近藤 常松 少佐・大滝 道助 少佐・富士本梅次郎 少佐・久保 来復 少佐・福田 昌輝	巡洋艦 ●敷島、鎮遠(戦艦)、松島、●橋立、八重山(通報艦) // ●須磨、千代田、秋津洲、和泉 砲 艦 ●扶桑(戦艦)、高雄、筑紫、鳥海、摩耶、宇治 水雷艇 ●雲雀、鷺、鵠、鵠 // ●第43号、第40号、第41号、第39号 // ●第73号、第72号、第74号、第75号 // ●第65号、第62号、第64号、第63号 // ●第69号、第70号、第67号、第68号
		附属特務艦隊	少佐・小倉銀一郎	亜米利加丸、佐渡丸、信濃丸、満洲丸、八幡丸、台南丸、熊野丸(特務艦)、春日丸(特務艦) (戦艦に参加した艦のみを示す。旗艦台中丸)
竹敷要港部 所 属		第17艇隊 第16艇隊 第18艇隊	少佐・青山 芳得 少佐・若林 欽 少佐・河田 勝治	水雷艇 ●第34号、第31号、第32号、第33号 // ●白鰐、第66号(修理中) // ●第36号、第60号、第61号、第35号

注) ●司令長官旗艦、●司令官旗艦または司令乗艦。

第3表 日本海海戦に参加したロシア艦隊の編成

艦 隊 名	司令長官または司令官	所 属 艦 名
第1戦艦隊	中將ロジェストウェンスキー(太平洋第2艦隊司令長官)	戦 艦 ●クニャージ・スワロフ、インペラートル・アレクサンドル3世、ポロディノ、アリョール
第2戦艦隊	少將フォン・フェリケルザム*	戦 艦 ●オスラビア、シソイ・ヴェリキー、ナヴァリン、アドミラル・ナヒモフ(装甲巡)
第3戦艦隊	少將ネボガトフ	海 防 艦 ●インペラートル・ニコライ1世(戦艦)、グラーフ・アブラクシン、アドミラル・ウシャコフ、アドミラル・セニャーウィン
第1巡洋艦隊	少將エンクウィスト	巡洋艦 ●オレーグ**、アウローラ、ドミトリ・ドンスコイ(装甲巡)、ウラジミール・モノマフ(装甲巡)
第2巡洋艦隊	先任指揮官 大佐シェイン(スウェトラナ艦長)	巡洋艦 スウェトラナ、アルマーズ、ジェムチューク、イズムルード
第1駆逐隊	戦艦隊に付属	駆逐艦 ブイマイ、ベドワイ、ブルスツルイ、ブルーウイ
第2駆逐隊		// グロズヌイ、グロームキー、ボードルイ、プレスチャーシチー、ベズウプリョーチヌイ
	司令長官直属?	仮装巡 ウラル
運 送 船 隊	指揮官 大佐ラドロフ	工作船 カムチャツカ 運送船 イルツイシ、アナズイリ、コレヤ、スウィーリ、ルーシ(曳船) 病院船 アリョール、カストローマ

注) 5月27日対馬海峡に進入した艦のみを示す。●司令長官旗艦、●司令官旗艦、
* 5月23日死去、** ホンコーへ湾にてアウローラより旗艦変更。

4隻、第6戦隊のうちから巡洋艦秋津洲、和泉を配置していた。主力部隊の第1・第2艦隊は韓国南岸の加徳水道(鎮海湾の入口)付近に、第3艦隊の大部は対馬の尾崎湾に集結していた。

5月27日未明、外線の哨戒艦信濃丸は、白瀬灯台(五島列島の小値賀島西方約11.5哩の孤礁上にある)北西においてロシア艦隊を視認し、4時45分、その位置と進路

を報告して、6時少し過ぎまで接触を続けた。6時45分、巡洋艦和泉も接触し、次いで第5戦隊と第6戦隊、さらに第3戦隊がこれに加わった。鎮海湾と加徳水道付近に待機していた主力部隊たる第1戦隊と第2戦隊は、第4戦隊、駆逐隊、水雷艇隊を率いて泊地を発した。東郷平八郎連合艦隊司令長官は旗艦三笠を先頭に位置させ、大本営にあてて簡単な電文のなかに情況と決意を伝える

報告を行なった。

敵艦見ユトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直ニ
出動之ヲ撃滅セントス本日天気晴朗ナレ
トモ浪高シ

時に6時34分であった。

海上はもやのため視界は5〜6浬と狭く、
高い波浪のため水雷艇隊の航行は困難を極
めた。このため、艦隊は一時対馬の三浦湾
に避難を命じられた。

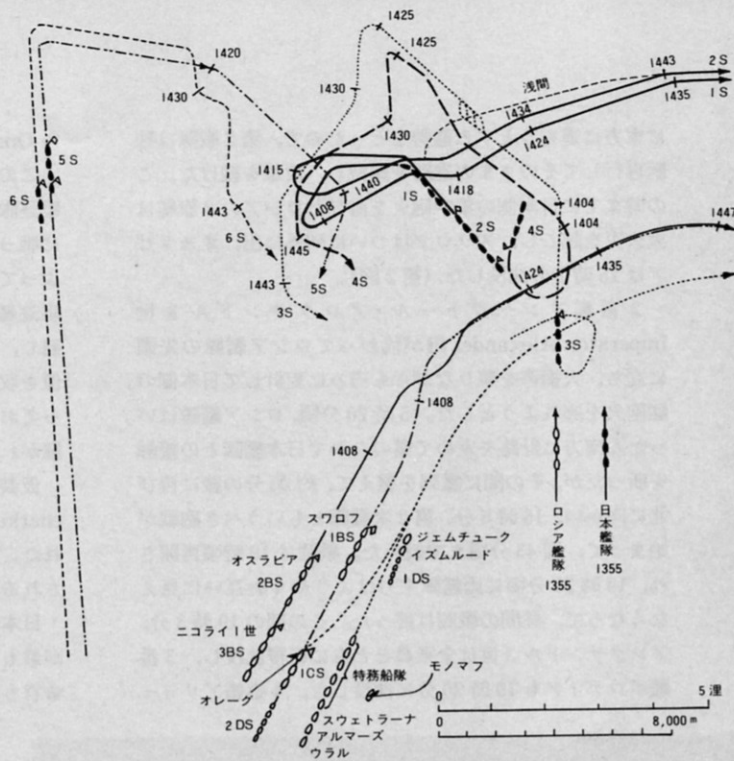
すでにロシア艦隊は全周を日本の巡洋艦
部隊によって監視され、その位置と進路は
すべて日本側に知られていた。旗艦三笠が
ロシア艦隊を視認したのは13時39分であ
り、ロシア艦隊はすでに対馬と壱岐の間で
海峡を通過し、沖ノ島西方約8浬の地点に
達していた。

日露両艦隊は互いに反航の態勢で急速に
接近し、13時55分、旗艦三笠の檣頭にZ旗
が掲げられた。「皇国ノ興廃此ノ一戦ニアリ
各員一層奮勵努力セヨ」の意である。

14時5分、ロシア艦隊先頭との距離約8、
000メートルを隔てて、三笠は急に左折して進路を南西
から東北東にとり、続く第1・第2戦隊の各艦も三笠に
なまって順次回頭してロシア艦隊の進路を押さえると
ともに同航戦にもちこむ態勢を整えた。

日本艦隊の敵前における回頭は、丁字戦法の名で後世
有名となった。これは当時第2艦隊の参謀であった佐藤
鉄太郎中佐（のち中将）や東郷平八郎大將を賛美する伝
記を書いた小笠原長生中将などの著作の影響が大きい。
もっとも航跡図を見てもあまり丁字という印象は受けない
が、敵艦隊の北方への進路を押さえ、あくまで同航戦
にもちこんで敵に決戦を強いる態勢をとったことに成功
したと考えてよい。これは前年の黄海海戦で日本側の回
頭時機が遅れたためにロシア艦隊が逃走し、日没までに
追いつくのに苦労して、結局1隻の敵艦も撃沈できなかつ
た苦い戦訓がその根底にあったと考えられる。敵前回頭
は大胆な賭けであったという通説についても、8,000
メートルという距離ではごく短時分の砲撃での命中の確
率は低く、それほど危険な行動ではなかったという第2
次大戦後の黛治夫氏のような砲術関係者の主張が定説に
なりつつある。

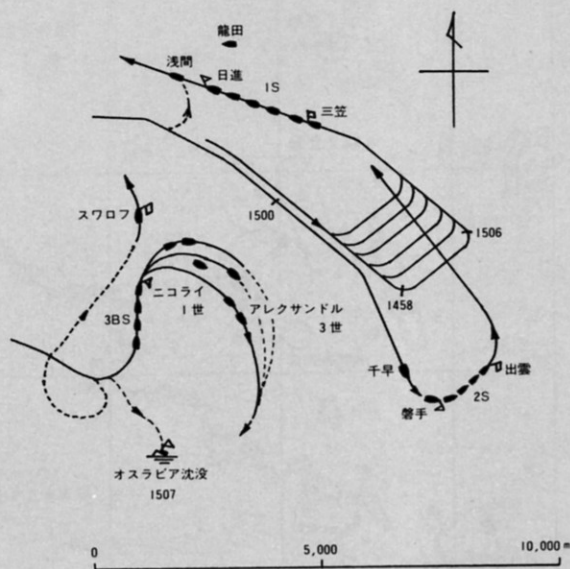
日本艦隊の回頭を見るや、ロシア艦隊は好機とばかり
一斉に発砲した。そして14時10分、距離6,000メー
トルにおいて三笠は初めて応砲した。2番艦敷島以下の諸
艦も回頭を終わりたい発砲した。日本の第1戦隊（戦
艦4隻、装甲巡洋艦2隻）はロシア第1戦艦隊の先頭に
立つロジェストウェンスキーの旗艦クニャージ・スワロ



第1図 緒戦における日露両軍位置

フ Kniaz Suvarov に、第2戦隊（装甲巡洋艦6隻）は同
じく第2戦艦隊の旗艦オスラビアに砲火を集中した。こ
の間、第3・第4・第5・第6各戦隊は、ロシア艦隊の
後尾を攻撃する態勢を整えた（第1図）。

日本艦隊は優速を利用してロシア艦隊を南方に圧迫し、
その前路を押さえこもうとしたため、その進路はやがて
東方に、次いで東南方に転じた。15時6分、第1戦隊は
ロシア艦隊の前方に出すぎたので、それまでの殿艦日進
を先頭として一斉回頭を行なったが、ロシア艦隊はさら



第2図 5月27日1515時の日露両軍位置

に東方に進もうとする態勢をとったので、第2戦隊は独断専行してそのままの進路を維持し、攻撃を続けた。この時までに日本側の集中砲火を浴びたロシアの2旗艦は大火災を起こし、スワロフはついに列外に出、オスラビアは15時7分沈没した(第2図)。

2番艦インペラートル・アレクサンドル3世 Emperor Alexander IIIが代わってロシア艦隊の先頭に立ち、大損害を蒙りながらも巧みに変針して日本側の猛砲火を逃れようとした。15時20分頃、ロシア艦隊はいったん南方に針路を定めて霧のなかで日本艦隊との接触を断ったが、その間に艦列を整えて、約20分の後に再び北に向かい、16時6分、第2次戦闘ともいべき砲戦が始まって、同43分頃まで続いた。戦闘は18時頃再開され、19時20分頃に両艦隊主力はようやくお互いに見えなくなって、昼間の戦闘は終わった。この間の19時3分、アレクサンドル3世は全乗員とともに転覆沈没し、3番艦ボロディノも19時20分に沈没した。4番艦アリヨ-

ル Orel もすでに大損害を蒙っていた。

この間、スワロフは行動の自由を失ったまま、日本の駆逐隊と水雷艇隊の雷撃を繰り返し受け、最期まで勇敢に戦ったが、ついに19時20分、第11艇隊の魚雷攻撃によって止めを刺された。しかし、すでに17時30分頃、駆逐艦ブイヌイ Buini は猛火に包まれたスワロフに接舷し、ロジェストウェンスキー司令長官以下の司令部幕僚を収容していた。同司令長官はこの時すでに重傷を負っており、ロシア艦隊の指揮権はネボガトフ少将に引き継がれた。

仮装巡洋艦ウラル Ural, 工作船カムチャツカ Kamchatka, 航洋曳船ルーシ Russ もこの日の昼戦で撃沈された。こうしてロシア艦隊の新鋭戦艦5隻中4隻が撃沈されるという結果となって、大勢は決したのである。

日本側では旗艦三笠および第1戦隊の殿艦日進の損害が最も大きく、日進では主砲4門中3門が破壊され、司令官も負傷した。また、第3戦隊旗艦笠置もボイラー室に浸水し、応急修理のため戦場を去らねばならなかった。

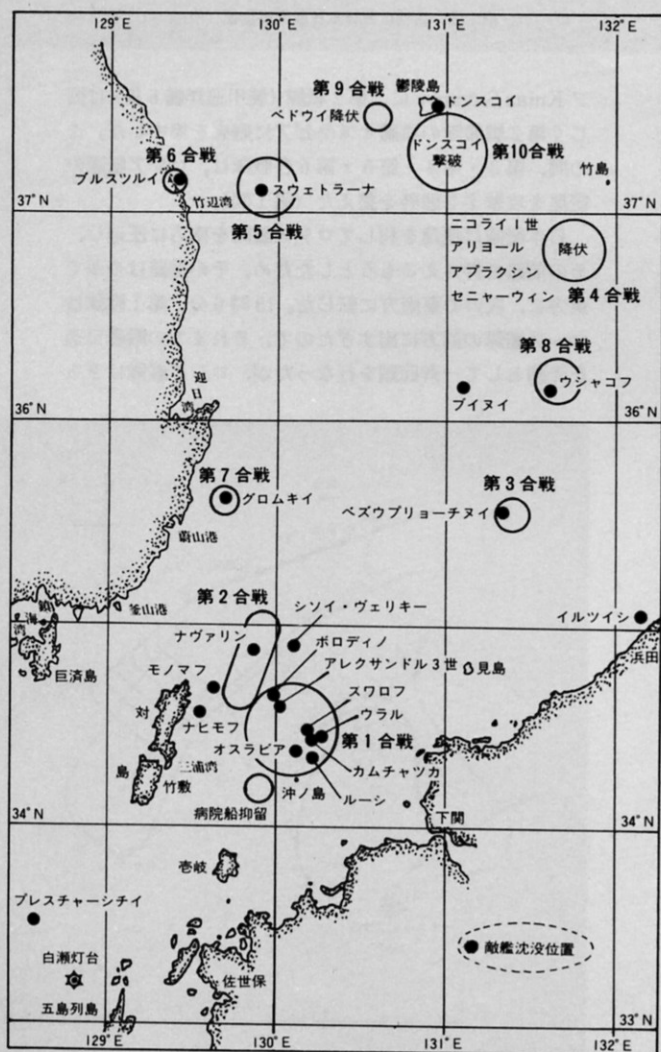
これら5月27日の昼戦を第1合戦と呼ぶ。

2) 駆逐隊・水雷艇隊の夜襲

離合数回の激戦に生き残ったロシア艦隊はネボガトフ少将に率いられて、暗夜の日本海を北23度東の針路をとってウラジオストクを目指した。しかし、現実にはロシア艦隊は広範囲に分散していて、ネボガトフ少将の指揮下にあったのは、戦艦インペラートル・ニコライ1世、アリヨール、ナヴァリン Navarin, シソイ・ヴェリキー Sissoi Veliki, 海防戦艦グラフ・アブラクシン Graf Apraksin, アドミラル・セニャーウィン Admiral Seniavin, アドミラル・ウシャコフ Admiral Ushakov, 装甲巡洋艦アドミラル・ナヒモフ Admiral Nakhimov, 防護巡洋艦イズムルード Izumrud の9隻にすぎなかった。

北航するロシア艦隊に対して、日本側は第1・第2・第3・第4・第5各駆逐隊、第1・第9・第10・第15・第17・第18・第20各艇隊は、20時少し過ぎより22時頃に至るまで、激しい襲撃を繰り返した。この結果、ロシア艦隊の後尾にあった戦艦ナヴァリン、シソイ・ヴェリキー、装甲巡洋艦のアドミラル・ナヒモフ、ウラジーミル・モノマフ Vladimir Monomakh はいずれも魚雷が命中し、その夜もしくは翌朝沈没した。

日本側の沈没は水雷艇3隻(第34号艇、第35号艇、第69号艇)のみであったが、暗夜に多数の駆逐艦と水雷艇が全速力で走りまわったため、味方同士の衝突が多発し、かつロシア側の防御砲火も



第3図 合戦およびロシア艦隊沈没位置

第4表 バルチック艦隊の帰途

艦種	撃沈 (含自沈)	捕獲	ウラジオ ストク到着	中立国入港	捕獲後釈放	本国帰還	計
戦艦	6	2	—	—	—	—	8
装甲巡洋艦	3	—	—	—	—	—	3
海防戦艦	1	2	—	—	—	—	3
巡洋艦	2	—	1	3	—	—	6
駆逐艦	5	1	2	1	—	—	9
その他	4	1	—	2	1	1	9
計	21	6	3	6	1	1	38

熾烈で損傷を負った艦艇も多かった。

これが第2合戦である。

3) ロシア主力部隊の降伏と各個撃破

5月27日の昼戦が終わると、東郷司令長官は各戦隊に対して、翌朝の会敵を期待して、鬱陵島付近への前進を命じた。

28日5時、第5戦隊が同島南東方にネボガトフの艦隊を発見した。他の戦隊も報に応じてこの海面に急行し、9時30分頃には第1・第2戦隊がロシア艦隊の進路をさえぎる態勢をとった。日本艦隊は10時34分に射撃を始めたが、ロシア側は応砲せず、万国信号で降伏の意志を表明した。戦艦ニコライ1世にならい、戦艦アリヨール、海防戦艦アブラクシン、セニャーウィンも白旗を掲げたが、快速の巡洋艦イズムルードのみは日本艦隊の包囲網の間隙をついて遁走した。これに対して第6戦隊の諸艦が追跡したが、ついに追いつけなかった。

これによって、ロシア艦隊の主力はまったく壊滅したこととなった。これが第4合戦である。

第1戦隊と第2戦隊は4隻の捕獲艦を伴って佐世保に向かったが、戦艦アリヨールは損害がひどく、漏水もあったので舞鶴に護送された。

ロシア艦隊は27日の昼戦で巡洋艦以下の艦艇が広く分散してしまい、小部隊あるいは単艦で行動したものが多数あった。これらの艦の大部分は28日中に各所で日本艦隊によって捕捉、撃滅された。これらの戦闘はそれぞれ第3および第5～10合戦の名称で呼ばれている(第3図参照)。このなかには日本の駆逐艦連がロシア駆逐艦ベドウィ Biedovy を降伏させ、重傷を負ったまま同艦に収容されていたロジェストウェンスキー司令長官を捕えるというエピソードも含まれている。

また、エンクウィスト少将の率いた巡洋艦3隻(オレーグ Oleg, アウローラ Aurora, ジェムチューク Jemtchug)は27日夜にウラジオストク行きを断念して南に針路を転じた。3隻とも若干の損害を受けており、結局6月3日にフィリピンのマニラ港に入り、そこで抑留、武装解除された。

上海には駆逐艦ボードルイ Bodri と運送艦2隻が入港、いずれも抑留された。

激しい戦闘にもかかわらず比較的軽微な損害のままウラジオストクに入港できた幸運な艦は、巡洋艦アルマーズ Almaz (実態は皇帝用ヨット)、駆逐艦ブラーウィ Bravi, グロズヌイ Grozni の合計3隻だけであった。ネボガトフ艦隊と行動を共にし、降伏を拒否して日本艦隊の包囲網突破に成功した巡洋艦イズムルードは5月29日夜、ウラジーミル湾に到達したが、暗夜のなかで湾

口の暗礁に乗り上げ、破壊して、九切の功を一簣に欠いてしまった。

対馬海峡に進入したロシア艦隊の大部分はこうして壊滅した。第4表はこれをまとめたものである。

▶おわりに

このように日本海海戦は日本側の圧倒的な勝利に終わった。世界の海戦史上でもこれほどの徹底的な勝利は数少ない。また、戦艦同士が対戦し、その搭載する重砲で相手の戦艦を撃沈できることを実証した最初の日海戦でもあった。このことが戦艦とその重砲の持つ評価をますます高め、大艦巨砲主義、下級戦艦の建造へと軍艦設計の思想を進ませてゆく。このあたりの詳しい戦訓については、かつての本誌に福井静夫氏による下記のような評論があり、詳細はこれに譲りたい。

「日露戦争における日露両戦艦とその被害に関する戦訓について(上、中、下)」。本誌21～23号、1959年5～7月。

「日本海海戦60周年に想う——彼我の艦隊および艦艇に関する随想、特にロシア艦隊について(上、中、下)」。本誌93～95号、1965年5～7月。

日本海海戦の結果、ロシアは極東海域におけるシーパワの回復を断念せざるをえなかった。満州のロシア陸軍は連敗はしていても強気の姿勢を崩さなかったが、ロシア国内ではすでに革命勢力が一般民衆や軍隊のなかに浸透していた。ロシア政府もこれ以上の戦争継続はむずかしいことに気付いていた。これは日本側も同様で国力の限界に達していて、戦争を続けることは困難となっていた。日本海海戦は戦争の振子を大きく日本側に有利な方向に傾かせたもので、もし海戦に日本が勝っても不徹底な勝ち方であったならば、戦争の終結は別のかたちになったと思われる。その意味で日本海海戦は一つの戦訓ではあったが、日本の近代史の展開に大きな影響を及ぼした事件だったのである。

* * *

なお、本稿における海戦の記述および航跡図は、日本海軍の公刊戦史である軍令部(編)：『明治三十七八年海戦史』(1908年刊〈全4冊〉、1934年再刊〈全2冊〉)によった。